

上條 信彦（考古学）

脱穀・粉砕技術からみた東北アジア先史時代食料加工の研究

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、脱穀・粉砕用の石器を、日本列島の縄文時代から同時期の新石器社会である東北アジア全体にわたって、細かい資料観察とともに、その形態変化や機能変化から、東北アジア全体の食料加工の比較研究を行ったものである。膨大な資料を扱うとともに、その細かな観察から、研究対象を紐解いているところが圧巻である。さらに、石器の機能を復原するために、ミドルレンジセオリーに基づいた、民族誌、実験考古学、石器の使用痕研究を総合化することによって、機能を実証している。こうした研究は、これまでにない研究であり、本論文の秀逸さを示している。特に、石器の実験研究や金属顕微鏡などによる使用痕研究は、これまでにない完成されたものであり、今後、この方面の指針となる研究となろう。

また、東北アジア先史時代の脱穀・粉砕具の研究を行うことにより、最終的には縄文型モデルと東北アジア農耕型モデルを提起している。縄文型モデルは堅果類の脱穀・粉砕技術を示すものであり、大きく時期的に3段階に分けることを可能とする。それは、縄文草創期から早期後半、前期前葉から後期前葉、後期中葉から晩期の3段階である。この3段階とは、形態的な変化のみならず、復元された機能論から、使用痕観察によって実証的に機能の変化を示したものである。さらに、その3段階の変化過程を、システム論を中心としながら、環境や生態系の要因とともに社会的な変化を背景として進行していく過程を解釈している。

一方、東北アジア型農耕モデルは、磨盤・磨棒を中心とした華北型農耕の伝播に伴うものであるが、伝播とともに地域的な受容とその変容過程を、使用痕研究などによって実証的に進めており、中国や韓国においてこれまでにない実証的な研究が為されている。そして、東北アジア型農耕モデルに示された脱穀・粉砕技術が縄文後晩期以降に九州に影響を及ぼす可能性を考慮しつつも、その段階にみられる九州の脱穀・粉砕技術の変化に関する解釈に対し、こうした東北アジアとの関係を含めて今後の研究課題として残している。

以上のように、本論文は、縄文時代から同時期の東北アジア全体の脱穀・粉砕用の石器を扱った、これまでにない広範でかつ実証的な研究であり、学術的に極めて完成度の高い論文である。しかも、中国、韓国、ロシア沿海州、日本に渡る膨大な資料に対し、使用痕分析を含めた細かな観察に基づいた実証的研究を進めており、その研究労力はなみなみならないものがある。したがって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。